名古屋テレビ塔いまむかし

巻頭特集

復興のシンボル誕生から60年

昭和29年、新たなランドマークの誕生に名古屋の街が沸き立った。その名は、名古屋テレビ塔。高さ180メートル、当時東洋一の高さを誇った電波塔だ。開業から今年で60周年。「東洋のエッフェル塔」は、200万都市へと成長を遂げた戦後の名古屋を見守り続けてきた。

戦災復興を見守った東洋一の電波塔

高層ビルがひしめき合う名古屋きっての繁華街、栄。昼夜にぎわう様子を目の当たりにすると、かつてこの地が一面の焼野原だったとは信じがたい。名古屋は戦時中、空襲による大きな被害を受けた。63回に及ぶ空襲で死者は7800人を超え、市域の約4分の1を焼失。名古屋城天守閣が炎上し、街は焦土と化した。

終戦後の昭和20年11月戦災復興院が設置され、各地で戦災復興計画が進行。名古屋市では「中京再建の構想案」が発表され、都市整備が進められていく。整備計画の中でも主要となったのは、車社会の到来を見据えた広幅員道路の設置。栄を南北に貫く、長さ約1.8キロメートル、幅100メートルの久屋大通は昭和24年に整地工事が始まる。

日本国との平和条約（サンフランシスコ平和条約）が成立し日本が独立国として主権を回復した昭和27年、日本放送協会（NHK）名古屋放送局はテレビジョン放送の定期実験放送をスタート。翌年7月、国内初の集約電波鉄塔を建設すべく、県や市、NHK、中部日本放送（CBC）など市内の主要企業が結集し、名古屋テレビ塔株式会社が設立される。この年、国産初の14型白黒テレビが発売。サラリーマンの月給が約3万円であった時代に1台30万円前後と高価なもので、広場や電気店に設置された街頭テレビには黒山の人だかりができた。

人々が集う新名所へ 名古屋の成長とともに

建設地には、すでに整備が始まっていた久屋大通が選ばれた。構造設計を手がけたのは、のちに東京タワーや通天閣を手がけた「塔博士」こと内藤多仲（たなか）。高さを180メートルとし、90メートル地点にはガラス張りの展望台（現スカイデッキ）を設置することが決まった。

昭和28年10月、着工。工事は専門分野ごとに7社が担当した。いまほど高度な機材が無かった当時、作業にはツルハシやスコップを使用。鉄骨も人力で上げられたというから驚きだ。開始から約5カ月で地上47メートルまでの組み建てが完了。7カ月目には高さ90メートルの展望台に到達する。

最大の難関は、長さ52メートル、重さ40トンのアンテナを180メートルの高さまで吊り上げる作業。途中、何度も強風にあおられ工事中断を余儀なくされたが、昭和29年6月4日、最上部にアンテナが取り付けられテレビ塔は完成する。着工から完成まで、わずか9カ月。頭上で工事が進む様子には見物人が連日訪れた。

終戦から9年、新たな時代の到来を予感し、皆が空を見上げていたことだろう。

開業当日、塔脚には入場を待つ長蛇の列ができた。入場料は大人50円、子ども20円。ノンストップで稼働を続けた16人乗りエレベーター2台には、最大で3時間の順番待ちができた。翌年4月には開業から1年を待たずして、展望客数が百万人に到達。各地から人が訪れ、塔脚には観光バスがずらりと並んだ。

開業2周年事業として昭和31年、展望台までの393段を駆け上がる「クライミング競争」を開催。我こそはと集まった強者たちが自慢の健脚を競った。日米安全保障条約改定反対のデモが国内で激化した時には「愛知県民抗議大会」がテレビ塔北広場で開かれ、約3万5千人が声を上げる。

笑顔あり涙あり。テレビ塔は、人々と喜怒哀楽を分かち合った。

文化・情報を発信 魅力あふれる街の拠点へ

誕生から52年を迎えた平成18年、名古屋テレビ塔は装いを新たにした。エントランスやスカイデッキは、黒を基調としたシックな雰囲気に。土産物店などがあったフロアには、ウエディングが可能なレストランをオープンし、商業観光施設として再スタートをする。「もっと多くの人に足を運んで欲しいと一部をリニューアル。エレベーターを降りられたお客さまからは、『ホテルに来たみたい』と感想をいただくなど、好評を得ています」と話すのは、名古屋テレビ塔株式会社事業部の辻知史副部長。平成20年には、プロポーズにふさわしいデートスポット「恋人の聖地」に認定され、夜景を楽しむカップルが多く見られるようになった。

アナログ放送電波塔としての役目を終えた今、テレビ塔は携帯端末向けのマルチメディア放送を発信中。かつて各放送局の巨大な発信装置があった部屋は、展示会やイベントを開催する貸しスペースへと生まれ変わった。1階には、環境に配慮したアイテムが並ぶショップやカフェ、観光案内ボード「ぽくらのまちの案内所（SOCIAL TOWER CITY GUIDE）」を設置。春から秋に塔下で営業するビアガーデンは、人気スポットとして浸透する。

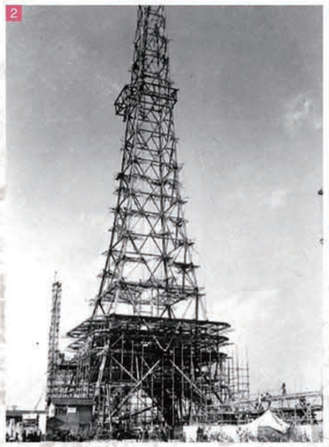
「電波を発信するために生まれたテレビ塔は、文化や情報を発信する拠点へと進化しています。リニア開通に湧く活気ある名古屋駅周辺に比べ、栄は少し元気がない。テレビ塔を中心に地区を盛り上げていきたいですね」

周辺では月に1回、近隣企業などを巻き込んだ清掃活動を実施。地域の新たなコミュニティーとして、交流の場を創出している。

幼い頃、両親に連れられて名古屋テレビ塔を訪れた辻さんは、外階段を下りながら身を震わせた苦い思い出を持ちながらも、スカイデッキから眺める景色がお気に入りだ。

「ここから景色を眺めていると気分がいい。晴れた日には、御嶽山や伊吹山、伊勢湾の水面の輝きも見えるんですよ。時間や季節によって、見え方が異なるのも魅力。冬は、夜景が一段と美しいですよ」と笑顔を見せる。

時は流れ、街は表情を変えていく。今日も栄の空を仰げば、まっすぐと伸びるテレビ塔が見える。



1 開業初日には、大勢の人々がテレビ塔に集まった。入場料は、大人50円。当時のコーヒー1杯の値段とほぼ同じ（昭和29年6月20日） 2 地上135メートルまで工事が進んだテレビ塔（昭和29年4月） 3 テレビ塔建設直後に植えられたクスノキ。60年経った今、大木へと成長し、都心のオアシスとして、訪れる人に安らぎを与えている 4 三菱重工業神戸造船所で製作・仮の組み立てがされた鉄骨は、トラックで名古屋に到着

名古屋テレビ塔と栄地区

週末には、テレビ塔の外階段を上り下りする「スカイウォーキング」を開催。この季節は、風が心地よいので、オススメです

◀スタッフ　大澤千恵さん

▲観光案内ボード「ぽくらのまちの案内所（SOCIAL TOWER CITY GUIDE）」では、栄地区の飲食店、ショップ情報を掲載。旬な情報をチェックするならココ！

特別ライトアップも

NAGOYA TV TOWER INFORMATION

60周年記念事業開催

6月20日からは60周年を記念した特別ライトアップを開催。約1万個のLEDがダイヤモンドのように輝き、初夏の夜を演出する。7月から、夜景評論家の丸々もとおさんを総合プロデューサーに迎え「光の万華鏡」を開催。多数のイルミネーションによって展望台が幻想的な空間へ様変わりする。

文・写真／新井のぞみ　写真／名古屋テレビ塔株式会社提供　デザイン／松葉真人　　参考文献／「名古屋テレビ塔 50年の歩み」名古屋テレビ塔株式会社、名タイ昭和文庫3「ぽくらの名古屋テレビ塔」樹林舎